

第4章 副都心として機能強化すべき南草津の方向性

1 立命館大学・草津商工会議所・草津市役所から始まる交流

前章で見たように、南草津を周辺地域との関係性のなかでとらえ、その強みを生かすことを優先し、中・長期的には弱みを克服していくことで南草津の個性を際立たせ、南草津の持続可能性を高めることができる。

南草津まちづくり研究会での議論や立命館大学生へのアンケート調査でも明らかになったが、約18,000人も学生の規模をもつ大学が駅の近くにあることは南草津の強みである。

そこで、南草津でも立命館大学がその存在感を高め、UDCKが実践しているように、自治体（県・市）と市民（企業等も含む）と大学の交流が一つの拠点で絶え間なく続き、常に何か創造されていく状況をつくることができれば理想である（イメージについてはP26-28参照）。

UDCKが交流拠点として機能しているのは、組織と人と空間がそれぞれ包容力を持ち、全体として機能していることにある。そして、その包容力のベースとなっているのが、ゆるやかで自由な「組織」であり、広い視野と行動力を持つ「人」であり、利便性が高く開かれた「場所」である。

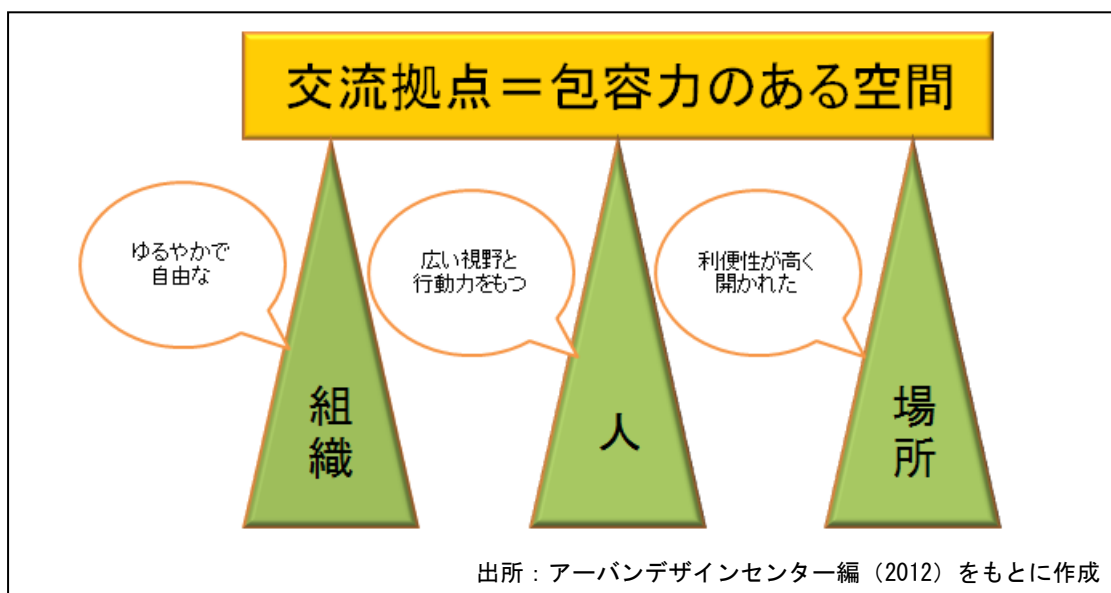


図4-1 交流拠点のベースとなるもの

南草津でこのような「包容力のある空間」をつくるためには、とくに拠点の見える化が重要になる。現在の南草津ですぐにそのような場所を設けることは困難であるが、まちづくりへの多様な主体の積極的な関与を生み出すために、まずは駅前の一等地に拠点となる場所を設けることから始める必要がある。

そして、拠点には様々な立場の専門家が必要である。そこには大学の貢献があることが前提で、市民の活動支援、企業の資金協力、自治体職員の職能開発等も必要となってくる。

なお、2014年は立命館大学びわこ・くさつキャンパスが開学20周年を迎える節目の年であり、同時に南草津駅は開業20周年、草津市は市政60周年を迎えることとなる。このように節目の年が重なることは、南草津にとって、多様な主体がまちづくりにかかわる絶好の機会でもある。今後も、10年ごとにこれらの節目の周年記念が重なることから、その都度、関係者が多くの人を巻き込んで南草津のまちづくりの方向性を内省し、新しいまちづくりの方向性を共有していくことも重要である。

2 住みやすさの維持

これまで見てきた調査結果によれば、南草津はおおむね住みやすい場所として認識されているようであるが、それは日用品の買い物のしやすさや南草津駅の電車の利便性によるところが大きいようである（P20-25）。

今回の調査では、子どもに対する教育水準の高さや文化芸術の水準の高さというソフト面で住みやすいとの回答は得られなかった。しかし、前章で見たユーカリが丘の事例のように住民のライフスタイルに応じた生活環境を満たし、末長くまちに住み続けてもらうためには、教育や文化芸術等のソフト面の充実も欠かせない。

また、ユーカリが丘の「住み替え制度」のように、購入者の自己負担額を少なく抑えながら、高齢者と若者の住み替えを仲介して促進していくことも考え得る。末長くまちに住み続けてもらうよう、住み替えに積極的に取り組む民間業者がいればいいが、そうでない場合は、まちづくり会社等の公的な仲介が必要となる場合もある（イメージについてはP29-31参照）。

そのほか、南草津駅前の整然とした街並みは人工的であるために人の息づかいが感じられにくく、緑を増やしていくということも考えられる。人工的なまちに息づかいを感じさせるための動きとしては、近年、緑被率だけでなく、実際に視界に入

る緑の量である緑視率⁴⁶を増やして住環境の改善を図る自治体も出てきている。駅前に大型マンションが立ち並ぶ南草津でも、緑視率の向上を図っていくことについては一考に値する。

また、緑を増やす際には、そこをきっかけとしてどのようにコミュニティを形成していくのかという長期的な視野も必要である。2010年の野路西部土地区画整理事業時に、住民が南草津駅の西口一带に数多くフラワーポットを設置しているが、日々の管理等は地域住民の取り組みだけでは限界があるのが現状である。そのため、新たにまちの緑化をテーマにコミュニティを形成していく場合には、その過程において、今まで意識的に連携をしてこなかった学生や大学も積極的に巻き込みながら取り組んでいくことも重要である。

まちの緑化は一例に過ぎないが、公園の遊具を設置する際の空間デザイン等をコミュニティの形成も含めて考えていくためには、住民や大学関係者等が具体的な場面で参加できる機会を演出することが必要であり、それをコーディネートする人の存在が必要である。コーディネート役は自治体職員もあり得るが、長期的な視点や当事者性からみれば、民間側から声があがることが望ましい。

そのような意味では、南草津駅周辺で2013年度から予定されている野路公園整備⁴⁷は、今後の南草津の発展の試金石となる。計画の段階で大学や市民がどれだけ主体的、具体的に関わられるかということが問われてくる。また、文化芸術面でも、滋賀県立しが県民芸術創造館の今後の利用方法について同様のことがいえる。



出所：草津未来研究所撮影 2012. 7. 25

図 4-2 南草津駅西口のフラワーポット

⁴⁶ 路上で人の視界に入る緑の割合のことをいい、大阪府や兵庫県西宮市等が政策に取り入れている。

参考ホームページ 大阪府「まちの緑視率の公表（試行）」

<http://www.pref.osaka.jp/kannosomu/ryokushiritsu/index.html>（2013年1月11日閲覧）

⁴⁷ 草津市野路8丁目地先の仮又池周辺や野路小野山製鉄遺跡の2.7haを対象にした公園整備事業のこと。

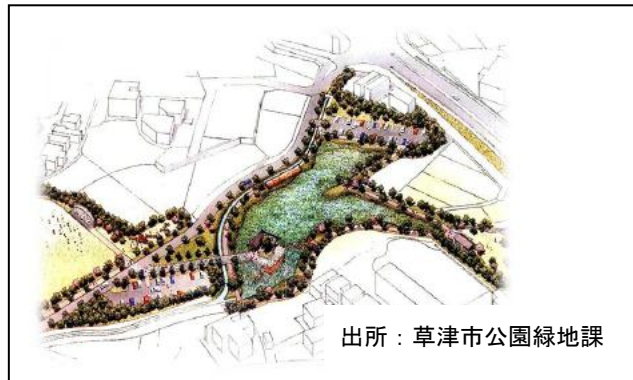


図 4-3 野路公園イメージ図

その他、住みやすさを維持するための機能については、次のものが考えられる。

- ①魅力的な商品をそろえ、楽しくショッピングできる商店街のある街
- ②もてなしの心で満ち溢れた人とまちの存在
- ③思い出に残る地域性豊かな芸術・エンターテインメントのある街
- ④基礎教育に優れたまちづくり

3 交通インフラの整備

第2章で見たように、市内には南草津の交通インフラの整備に対する市民の声も多くあり、その対応が望まれている（P22-23）。

また、平成22年度道路交通センサスでも、図4-4のとおり、南草津で渋滞が慢性化していることがわかる。1.0以上の数値が混雑していることを表す混雑度では、南草津の国道1号で1.50と1.51を示しており、主要地方道平野草津線では慢性的な混雑状態を表す2.90を示している。主要地方道平野草津線は、南草津駅と立命館大学びわこ・くさつキャンパスをつなぐ主要道路でもあり、将来的に南草津駅前に交流拠点をもつことも考えれば、南田山交差点の渋滞解消を中心とする南草津の交通インフラの整備は早急に必要である。

交通渋滞の解消は直近の課題ではあるが、ここでもまた、長期的な展望をもちつつ、先に見たまちの緑化や公園整備と同様の趣旨で、実際の利用者である市民を交えた研究会を開催する等の方法で広く意見を募っていく必要がある。



図 4-4 草津市の道路の渋滞状況